

広重と江戸鳥瞰図

大久保純一

Hiroshige and Bird's-eye Views of Edo

はじめに

- ① 江戸後期の鳥瞰図
 - ② 葛吉版《東都名所》
 - ③ 広重の江戸鳥瞰図の影響
- まとめ

【論文要旨】

江戸時代後期から明治初期にかけて、江戸の市街や日本全土、あるいは横浜などの都市を描く鳥瞰図が、鍛形憲斎・葛飾北斎・歌川貞秀らによつて数多く制作されている。彼らの鳥瞰図は、透視図法的な空間の理解を基礎として、対象となるエリアをパノラミックに描き出している。しかしながら彼らの鳥瞰図は、景観を構成する細部の名所情報を、画面の中にふんだんに盛り込むことに重きを置いていたため、視覚的リアリティーの実現が犠牲になることが多かった。ときに透視図法による奥行きを無視したり、地形を大胆にデフォルメするなど、自在な変形をもいとわないのである。

江戸名所絵の代表的な作者である歌川広重に関しては、従来、鳥瞰図の作例が絵画史的な検討の対象になることはなかった。しかしながら、彼が天保年間後期に描いた三枚統のシリーズである葺屋吉蔵版《東都名所》全二四図には、江戸とその周辺の名所景観を広い視野で俯瞰した、鳥瞰図と呼ぶべき図が数多く含まれている。それらは、

かなり手慣れた透視図法を用いて、地形のデフォルメの少ない、きわめてリアリティーの高い景観描写を実現している。構図的には、対角線上に画面の基軸となる河川や海岸線を配置し、それらを水平線上の消失点に向けてダイナミックに収束させて、深い空間の奥行きを表現している。憲斎・北斎・貞秀らの鳥瞰図が、名所情報の伝達にかなりの比重を置いていたのに対して、主として広重の《東都名所》は、景観の再現性に重きをおいたものであったといえる。

江戸後期以後の鳥瞰図の系譜の中で、広重の《東都名所》が注目されることはなかったが、透視図法によるリアリティーの高い景観描写と、三枚統の画面を対角線でまとめる構図は、幕末・明治期の二代広重や貞秀らの横浜市街図にも大きな影響を与えている。